

【講評】

宇治っ子朗読劇団☆Genji『桐壺～はじめのはじめの物語～』

源氏物語を子どもだけで語る・演じるということで、もっとも関心をひかれていた公演でした。源氏物語は、現代でも今なお多くの人々を魅了してやまない物語です。和歌や原文に織り込まれた心の機微を、子どもたちがどのような視点で解釈し、展開してくれるのか楽しみにしていました。

全体的にみて、まず衣装のクオリティの高さに驚きました。すべて指導の先生の手作りということで、その熱意にとっても圧倒されました。子どもたちも、普段はまず手にすることもない衣装に身を包み、先生の情熱に負けない渾身の演技を見せてくれていたように思います。

ただ、この公演全体を通して最後まで引っかかっていたのは、これは「朗読劇」なのかということでした。子どもたちはそれぞれに手に台本を持ち、それを見ながら動いて「演じて」いました。演じるなら演じることに集中した芝居をし、朗読劇ならばもう少し動きを絞ってのやり方があったのではと思います。子どもたちの視線が定まらず、動きがブレてしまったり喜怒哀楽のメリハリがつかなくなったりと、見ている側の集中も振り回されてしまったような気がしました。それを考えると、朗読劇としてなら、劇の冒頭で用いていた原文を読みあげてそれを解説するという方法を一貫したほうが、かえって良かったように思います。原文から行間をふくらませ、子どもたちの解釈を子どもたちの言葉で語らせる、というのも楽しかったのではないのでしょうか。

また、今回は「はじめのはじめの物語」ということで、光源氏の父母（桐壺帝・桐壺更衣）の恋愛事情、そして幼い光源氏と義母・藤壺宮の出会いまでをまとめたストーリーでしたが、この場面はある意味、光源氏自身の恋愛を取り上げるよりも演じる上で工夫が必要であったかもしれません。比較的わかりやすい嫉妬やいじめ、悲恋が描かれているだけに、そのまま舞台に持ってきたのでは原作の文字の表面をなぞるだけになってしまいます。ステレオタイプにではなく、光源氏以前の物語というある種の自由度のもとに、もう少し掘り下げる部分があつてよかったのではないのでしょうか。そこに子どもたち自身の言葉が加われば、表現はもっと豊かになると思います。

しかしながら、小学生の彼ら彼女らが等身大、あるいは少し背伸びして考える「恋愛」を軸にした源氏物語は、見ていてとても新鮮でした。全員が宇治近辺在住の子どもたちということで、どこよりも身近に源氏物語を感じられるというのは羨ましいです。これからも、源氏物語の新たな魅力や表現の可能性について発信し続けてほしいです。

西恵野（大阪大学演劇学）